各校ページ【立教小学校】

子どもたちが放った、愛の輝き

立教小学校チャプレン　下原　太介

「アフター コロナ」の地平線が緩やかに、しかし確実に私たちの視界の中に入り始めた2022年度1学期中盤、立教小学校では3年ぶりに立教女学院小学校の皆さんと共に過ごすプレーデー（合同運動会）が開催されました。計画、準備、そして、実施の段階に至るまで両校体育科の先生方を中心として、「アフター コロナ」という響きに気を緩めることなく両校が一丸となり、徹底した感染防止対策を行いつつも、未開催となった2年間分の心の距離をしっかりと縮めることのできた、笑顔と充実感の溢れる素晴らしい一日となりました。

その中で、私は立教小学校チャプレンとして、開会祈祷を行うという大切な役割を与えられました。そして、その祈りを行うに当たり、色々な想いを巡らすうちに、未開催となった2年の間に、その再開を待たずして卒業せざるを得なかった現在の中学1年生、2年生の子どもたちへと想いが至りました。だからこそ、開会祈祷の中で「プレーデーの再開を待たずして卒業せざるを得なかった現在の中学1年生、2年生のお兄さんお姉さんの分まで、この日を楽しむことができますように」と祈りました。

“再開できたのだから、過去2年間のことまでもALL OK!! もう過ぎたこと（アフター）”でもなく、ましてや、コロナ禍をなかったことにすることも、時間を巻き戻すこともできません。この2年間、本来であれば経験できたであろう豊かな学びや驚くほどの成長、体験できたであろう喜びと笑顔に満たされた時間を得ることのできなかった子どもたちの心の空白（コロナ・トラウマ）に常に心を留め、その心の空白を何か別のもので満たしてあげたい、癒してあげたいと心から思うのです。私自身にできる愛し方と祈り方で、そして、立教小学校に集う私たち教職員や保護者の方々にできるやり方で。

立教小学校に集う私たち教職員や保護者の方々にできるやり方…、その一つが今夏、実現しました。それは、どんなに規模が縮小しても、どのように内容が変更しても、これまでの2倍、3倍の準備の時間が掛かろうとも、どれほど私たち教職員や保護者の方々の負担が増そうとも、感染防止対策を徹底し、子どもたちの命と身体と心の安全安心を厳守しつつ、可能な限り、これまでの様々な行事を継続・復活させようという強い想いのもとで実現した夏季キャンプとグローバルエクスカーション（小笠原、沖縄、四万十川、屋久島、北海道各地での分散体験学習）です。

夏季キャンプは日程を短縮し、更に集団感染防止対策として最小限の人員規模で行うことを意図して、2学年ずつの縦割り＆クラス単位（例：1年A組と3年A組のキャンプ、2年B組と4年B組のキャンプ等）で、同じプログラムのキャンプを複数回行いました。グローバルエクスカーションは、参加対象学年である5年生の子どもたちのご家庭に対し、実施日程一週間前からの外食制限・行動制限を心掛けていただくようにお願いし、万が一、現地において参加者に体調不良があった場合の対応策まできめ細やかに徹底検討し、実施に至りました。

夏季キャンプとグローバルエクスカーションにおける、このような感染防止対策はほんの一例ですが、この一例だけ見ても、これらが如何に私たち教職員や保護者の方々にとって、そして、参加する子どもたち自身にとっても大きな努力と忍耐、負担が必要であった

か想像に難くないと思います。

多くの準備期間の中、様々な場面で「“コロナだから、これまでの行事はやめよう、できない”という決断は簡単だけれど、私たちに必要な意識は“コロナの中でも、これまでの行事をどのように工夫したら、どのように変えたら、実施できるのか？コロナの中でも、子どもたちにとって、一番意味のある選択を考え続ける”ことではないか」という問い掛けが常にありました。

今夏、子どもたちは、その心の中を本当に多くの素晴らしい体験と色褪せない思い出で満たすことができたに違いありません。そして、コロナ禍の３年間で浸食されてできた立教小学校全体の心の空白（コロナ・トラウマ）を、私たち教職員や保護者の方々、そして子どもたち全員で想いと力を合わせて、少しでも豊かに埋めることができたひと夏のように感じます。

そして、こう思うのです。「今夏の経験は、子どもたち一人ひとりにとって、そして、立教小学校全体にとって、これまでの夏と同じくらい、否、もしかしたら、それ以上に素晴らしい時間になったのかもしれない」と。

「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」（ローマの信徒への手紙第５章3-4節）、「力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」（コリントの信徒への手紙Ⅱ第12章９節）、「わたしは弱いときにこそ、強い」（コリントの信徒への手紙Ⅱ第12章10節）、「その悲しみは喜びに変わる」（ヨハネによる福音書第16章20節）。

立教小学校の中で今夏を過ごした私の心では、これらのみ言葉は今、真の実感と確信、尊い喜びと感謝をもって、生き生きと成就しています。苦難の中にあっても、むしろ、その中にあってこそ、聖書のみ言葉が成就する場所、そこで生き、学び、成長し、働く立教小学校に集う私たち一人ひとりは、まさに練達を経て、今、希望の光と優しい強さの中にいるのです。

そして、その希望の光と優しい強さは、私たち大人が放つ時よりも、子どもたちが放つ時にこそ、より一層眩しく、美しく、そして、愛に満ち溢れるものとして輝き、その輝きに触れた者の魂を浄化し、神の愛へと導くもののように感じます。

あるクラスのキャンプ中、一つの班の子どもたちの中から、急遽、諸般の事情（コロナ感染などではありません）で帰宅を余儀なくされた子どもが一名、出ました。このことを知った同じ班の残りの子どもたちは、班の部屋に戻る廊下で、「よし、○○君のためにお祈りしよう！！」と話していました。その会話を耳にした私は、その子どもたちの後を追い、少し様子を窺（うかが）ってから声を掛け、部屋で円になり、一緒に祈りを捧げました。声を掛けず、遠くから様子を窺（うかが）い、子どもたちの自発性・自主性を大切にし、子どもたちだけで祈る時間を見守ろうかとも迷いましたが、遊ぶことのできる自由時間の中で、班の皆で集まり、その子のために祈りを捧げようとごく自然に思い、言葉に出してくれた、その子どもたちの優しさに嬉しくなり、私は声を掛けずにはいられませんでした。そして、共に祈りを捧げた後に、私の口から出た言葉は、「ありがとう」というものでした。

その子のために祈ってくれて、ありがとう。皆の優しい心を見せてくれて、ありがとう。皆の中におられる神様の御姿を示してくれて、ありがとう。こんなに温かく、幸せな気持ちにさせてくれて、ありがとう。そして、愛に満ちた輝きで、私を照らしてくれて、ありがとう。

苦難、忍耐、練達の先に、私たち立教小学校が目にしたのは、そのような素晴らしいひと夏の光景でした。